

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	富田昌平
2. 審査委員	主査：岡山大学教授 高橋敏之 副主査：兵庫教育大学教授 名須川知子 委員：岡山大学教授 渡邊満 委員：鳴門教育大学教授 田村隆宏 委員：岡山大学教授 西山修
3. 論文題目	幼児期における空想世界に対する認識の発達
4. 審査結果の要旨	<p>論文提出による学位申請者 富田昌平 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成27年2月11日（水）16時15分～16時45分</p> <p>場所：岡山大学教育学部東棟3階1308室</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>第1章 問題の所在と課題の明確化</p> <p>第1節 研究の背景と問題提起</p> <p>第2節 先行研究の概観</p> <p>第3節 研究の方法及び内容構成</p> <p>第2章 空想と現実との区別の認識の発達</p> <p>第1節 絵本に描かれた場面に対する認識の発達</p> <p>第2節 空想的な将来の夢に対する認識の発達</p> <p>第3節 空想的存在に対する認識の発達</p> <p>第4節 サンタクロースの現実世界に対する認識の発達</p> <p>第3章 想像の現実性判断に見られる魔術的思考</p> <p>第1節 想像の現実性判断に見られる魔術的思考とそれを促す要因の検討</p> <p>第2節 想像の現実性判断に見られる魔術的思考と空想と現実との区別の認識との関連</p> <p>第4章 空想世界を楽しむ心理の発達</p> <p>第1節 不思議を楽しむ心理の発達</p> <p>第2節 怖いもの見たさの心理の発達</p> <p>第3節 幼児期の空想の友達</p> <p>第4節 空想の友達に対する親の態度</p> <p>第5節 児童期以降の空想の友達</p> <p>第5章 総合的考察</p> <p>第1節 本研究の知見の総括と発達モデルの提起</p> <p>第2節 保育・幼児教育実践への提言</p> <p>第3節 今後の研究課題と展望</p>

子どもを取り巻く生活環境や社会環境の変化により、子どもの遊びは衰退し、遊び本来が持つ主体性や自発性は失われつつある。遊びや環境を通して子どもの主体性や自発性を育てるために、想像豊かな遊びの充実は不可欠であるが、遊びを支える彼らの空想世界とその認識発達に関する実証的な研究は十分になされていない。

そこで本論文では、幼児期における空想世界に対する認識の発達を解明し、その上で発達に関する仮説的モデルを提起し、保育・幼児教育実践への提言を行った。具体的には先ず、幼児を対象に空想と現実との区別の認識の発達を検討した。次に、想像の現実性判断に見られる魔術的思考を実証し、その発生に関わる要因を検討した。最後に、幼児・児童及び保護者を対象に空想世界を楽しむ心理の発達を検討した。

各章は、次のような内容で構成される。

第1章は、問題の所在を示し、課題を明確化した。第1節では、研究の背景を整理した。子どもを取り巻く環境の変化に注目し、遊びの充実を図るために指導・援助において遊びの面白さを追究していくことの重要性、及びそれを支える子どもの空想世界とその認識発達について解明することの必要性に論じた。第2節では、幼児期の想像や空想に関する実証的な先行研究を、空想と現実との区別の認識、魔術的思考、空想世界を楽しむ心理という3つの視点から整理した。第3節では、研究の目的、方法及び構成について述べ、本論文の全体像を描出した。

第2章は、空想と現実との区別の認識発達に注目した。第1節では絵本に描かれた空想的場面、第2節では将来の夢に見られる空想的な夢、第3節では様々な慣習的な空想的存在、第4節ではサンタクロースを取り上げ、実験及び面接調査から実証的な知見を得た。その結果、子どもは幼児期の終わり頃までに空想と現実との区別が可能になり、空想世界の虚構性について理解できるようになることが明らかになった。一方で、サンタクロースのような慣習的な空想的存在に関しては、偽物とは異なる本物の実在世界を概念化し、多様化していくことが判明した。

第3章は、想像の現実性判断における魔術的思考の発生とそれを促す要因に注目した。第1節では状況知覚、実在性認識、そして感情喚起との関連性を検討し、第2節では空想と現実との区別の認識との関連性を検討した。実験の結果、幼児期に子どもは現実的かつ合理的思考を洗練化させる一方で、空想的かつ魔術的思考も同時に共存・維持しており、状況や個人特性に応じて両者の間を揺れ動くことを実証した。

第4章は、空想世界を楽しむ心理の発達に焦点を当てた。第1節では手品の不思議、第2節では怖いもの見たさを取り上げて実験を行った結果、手品の不思議や怖いもの見たさを楽しむ傾向は幼児期において次第に高まることが明らかになった。また、そうした傾向は空想と現実との区別の認識発達と関連があるとの確証を得た。第3、4、5節では、空想の友達を取り上げ、幼児・児童及び保護者を対象に質問紙調査を行った。その結果、空想の友達を作り出し、それとの遊びを楽しむ行為は我が国の子どもの約1～2割程度で確認され、それらは親の態度や支援と関わりなく、児童期以降も保持され続けることが判明した。

第5章は、研究成果を総括し、保育・幼児教育実践への提言を示した。第1節では、本研究で得られた実証的知見を整理し、空想世界に対する認識の発達に関する仮説的モデルを提起した。第2節では、発達モデルをもとに保育・幼児教育現場で行われる遊び実践の意義と実践上の工夫や課題について論考した。第3節では、今後の研究課題と展望を示し、本論を結んでいる。

2. 審査経過

本論文の主要部分は、6編の査読付き論文として『発達心理学研究』（日本発達心理学会誌2002・2003・2004・2009・2009・2014）に掲載され、学術的評価を得ている。5名の審査委員が留意して討議した諸点は、以下の通りである。

(1) 研究目的と論文構成の整合性について

本論文は、幼児期における空想世界に対する認識の発達について実証的に解明し、保育・幼児教育における遊び実践に有用な知見を提供することを主要な目的としている。論文構成は、この目的に沿って、幼児期における空想と現実との区別の認識の発達について解明した上で、想像の現実性判断に見られる魔術的思考、及び空想世界を楽しむ心理の発達について検討するという流れである。したがって、研究目的に整合する妥当な論文構成になっていると認められる。

(2) 先行研究の概観と考察に使用された資料の扱いについて

本論文は、従来の研究領域の隙間を埋める研究と言える。先行研究の概観では、子どもを取り巻く環境や遊びの変化に関する論考を整理した上で、幼児期における想像や空想に関する実証的研究について整理し、本論文の位置づけと研究意義を明示している。考察では、第5章を中心に、先行の研究資料を用いながら、得られた成果と保育・幼児教育における貢献について論考している。よって、研究資料の質・量、扱い方ともに、学位論文の水準にあると判断できる。

(3) 分析と考察における客観性及び論理的な文章表現について

分析、考察共に総じて、主観的恣意的な記述を排除し、科学的な解釈や論理的な文章表現への配慮が認められる。分析では、適宜、分散分析や χ^2 検定などの解析手法を用いて、客観的な分析に努め、研究の再現性、妥当性、信頼性を高めている。また考察では、得られた実証的知見をもとに、先行研究や関連領域の知見を引用しながら、筋道を立てて論考を進めている。論の運び方は明快であり、得られた結果から、納得がいく合理的な結論を導くことができている。

(4) 教育実践学の学位論文としての独創性及び発展性について

幼児期において遊びが発達を主導することは言うまでもないが、それを支える幼児の空想世界とその認識発達に関しては、ほとんど実証的に解明されていない。本論文は、幼児期における空想と現実との区別の認識の発達を解明し、魔術的思考や空想世界を楽しむ心理の発達について、我が国で初めて解明している。それにより、保育・幼児教育実践に有用な知見を提供している。よって、教育実践学の観点から独創性に長けており、今後の研究の発展が期待される内容と言える。

(5) 学位に学校教育学を付記する根拠としての学校教育実践への貢献について

本論文は、幼児・児童及び保護者を対象に、空想と現実との区別の認識、魔術的思考、及び空想世界を楽しむ心理の発達を解明している。分析結果から、空想世界に対する認識の発達に関する仮説的モデルを提起し、その視座から保育・幼児教育における想像的探険遊び実践の発達の意義と実践上の工夫や課題について新たな提言を行っている。これらの点において、学校教育実践へ大いに貢献する成果と認められ、学校教育学の推進とその方法の確立に寄与する論文と言える。

3. 審査結果

以上により本審査委員会は、富田昌平の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。